

4ヶ月の経過にてMRI上損傷の拡大を認めた外側半月横断裂の1例

○橋 優太 (たちばな ゆうた) (MD)¹⁾, 前 達雄 (MD)¹⁾, 井内 良 (MD)²⁾, 中川 滋人 (MD)²⁾,
大堀 智毅 (MD)¹⁾, 相原 雅治 (MD)³⁾, 中田 研 (MD)¹⁾, 吉川 秀樹 (MD)¹⁾

¹⁾ 大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学 整形外科

²⁾ 行岡病院 整形外科

³⁾ 相原病院 整形外科

【目的】

外側半月に横断裂を認め、経過観察にて損傷範囲が拡大した症例を経験したので報告する。

【症例】

16歳男性。ラグビー練習後に右膝痛を自覚したため来院。水腫、可動域制限は認めず、McMurray test 及び伸展位外反強制にて外側関節裂隙に疼痛を認めた。MRIにて外側半月の中節部に横断裂と考える輝度変化を認めるも、内縁から1/2程度の損傷であった。手術を勧めたが、症状が軽快傾向にあったため、本人の強い希望にて、徐々にラグビーに復帰した。ところが、4ヶ月経過するも疼痛が残存するため、再度受診。水腫、可動域制限はなく、McMurray test では外側に疼痛を認めた。MRIを再度撮影したところ、外側半月横断裂の損傷範囲の拡大を認めたため、手術治療となった。手術は本人の強い希望もあり縫合術を選択した。関節鏡所見としては、外側半月の中節部に、横断裂+斜断裂を認め、縫合術を施行した。

【考察】

スポーツ活動において、外側半月横断裂は比較的多い損傷である。切除術により変形性関節症性変化が進行する症例も認めることから、治療方針には慎重になる必要がある。本症例のように、経過観察することにより、損傷範囲が広がる症例もあることから、治療方法に加え、治療時期も考慮する必要があると考える。